日本のオペラ2017

石田麻子

1. 日本のオペラ2017

オペラにおける共同制作の世界的な潮流が、日本でのオペラのあり方に沿った形で定着している。そんな印象を裏付けるかのように、2017年も大規模な共同制作公演が複数行われた。

オペラ団体が各地の劇場や地域のオーケストラ等と連携してオペラ制作を行う国内共同制作は、協働する相手を代えながら実施されている。中心となる組織は比較的固定化しているものの、オペラ団体が、オーケストラ等や劇場と協働するという、団体がオペラ制作を先行させてきた日本ならではの国内共同制作のあり方が、手法としても概念としても定着した格好だ。加えて、近年は、劇場主導による巡回型オペラ制作が全国で行われるようにもなった。海外での劇場同士の大規模な共同制作とは異なる展開がここでも指摘できる。

2. オペラ団体の制作

各オペラ団体がその活動を重ねて、我が国のオペラ公演の歴史をつくってきた中で、いくつかの団体が周年行事を実施した。**東京二期会**は、《ばらの騎士》《蝶々夫人》《こうもり》を、二期会創立65周年・財団設立40周年記念をうたって実施した。**東京オペラ・プロデュース**が第100回定期公演《ラインの妖精》を行っている。**熊本シティオペラ協会**30周年記念《笛姫》、**立川市民オペラ**25周年記念《カルメン》、**くろいそオペラをつくる会**設立20周年記念《那須野巻狩り》が実施された。浅草オペラ100周年記念の事業がいくつか行われたことも記録された。

2-1. 大規模なオペラ団体の活動

東京二期会が、《トスカ》《魔笛》《ばらの騎士》《蝶々夫人》《こうもり》を上演した。《トスカ》は、ローマ歌劇場のプロダクションをダニエーレ・ルスティオーニの指揮で。《魔笛》は、2016年に愛知県芸術劇場で上演された勅使川原三郎演出のプロダクションを、若手の川瀬賢太郎指揮で再演した。《ばらの騎士》は、リチャード・ジョーンズ演出によるグラインドボーン音楽祭のプロダクション。《蝶々夫人》は、栗山昌良による演出、指揮はガエタノ・デスピノーサ。日生劇場での《こうもり》は、ベルリン・コーミッシェ・オーパーのプロダクションでアンドレアス・ホモキの演出。演出家からの信頼の厚い菅尾友が演出補と日本語台本を担当、ホモキも来日して公演にも立ち会った。オルロフスキーは女性でファルケの仕組んだ復讐劇の登場人物とするなどの読み替え演出が展開された。指揮は阪哲朗。

東京二期会は、近年、海外の歌劇場や音楽祭との提携公演を積極的に行ってプロダクションの幅を広げ、その舞台の演出家や指揮者の起用に特徴を持つようになった。東京以外の複数の会場で公演活動を展開しているのも近年の傾向である。

日本オペラ振興会は、藤原歌劇団公演では、山田和樹指揮による《カルメン》の新制作を実施。山田の指揮と日本フィルハーモニー交響楽団がオーケストラ・ピットに入ることが話題となった。《セビリャの理髪師》では脇園彩がロジーナを歌った。ロッシーニ音楽祭での同役や、《試金石》、マルティーナ・フランカのヴァッレ・ディトリア音楽祭でのメ

ルカダンテ作曲《フランチェスカ・ダ・リミニ》でもそれぞれ主役を務め、ミラノ・スカラ座やトリエステ劇場などで大活躍中の脇園の、卓越したプレゼンテーションと歌唱力に間近に接する機会となった。《ノルマ》は日生劇場やびわ湖ホール、川崎市スポーツ・文化総合センター、東京フィルハーモニー交響楽団との共同制作公演。主役ノルマを歌ったマリエッラ・デヴィーアの、日本での最後のオペラ公演となったことがこれも大きな話題となった。《ルチア》の初日には藤原歌劇団を代表するソプラノ光岡暁恵に加え、主役のテノールとバリトンに韓国人歌手を1人ずつ起用し、キャスティングに厚みを持たせた。アジアの隣国との協働の可能性をいち早く取り入れた格好だ。

日本オペラ協会は原嘉壽子作曲の《よさこい節》と伊藤康英作曲の《ミスター・シンデレラ》を公演。大賀寛は《よさこい節》を最後に、総監督を勇退した（同年7月31日逝去）。同協会の郡愛子・新総監督は、新国立劇場小劇場での《ミスター・シンデレラ》公演から総監督としての任にあたっている。

2-2. 地域におけるオペラ団体の活動

関西歌劇団は、《白狐の湯》《赤い陣羽織》を上演して成果をあげた。とりわけ《赤い陣羽織》は、故武智鉄二演出舞台の出演者がアドヴァイスをしながらの上演となったこともあって、初演時の様子をいまに伝える機会が実現した。

関西二期会による大規模会場での公演は2演目。5月には《イリス》をダニエーレ・アジマン指揮、井原広樹演出で。10月の《魔弾の射手》は、若手の菅尾友演出で上演した。菅尾の演出はストーリー展開を最後まで大きく見通した上でダイナミックに舞台を構成しながら、同時に細部に至るまで工夫を凝らした演出としたことに特徴がある。指揮はキンボー・イシイ。

堺シティオペラは、《ラ・ボエーム》を大阪狭山市文化会館（SAYAKAホール）大ホールで。柴田真郁指揮、粟國淳の演出による。**東京オペラ・プロデュース**の日本初演作品への取組みも続いた。2017年は2月にレスピーギ作曲《ベルファゴール》と5月にオッフェンバック作曲《ラインの妖精》、さらにこれまでに上演実績のあるドニゼッティ作曲の《ビバ！ラ・マンマ》を11月に公演した。

藤沢市民オペラは、芸術監督の園田隆一郎を指揮に、粟國淳を演出に迎えて《トスカ》を実施した。園田は、この公演で藤沢市民オペラの芸術監督に就任してから1期3年を務めたことになる。この他、各地で行われた市民オペラ活動をあげてみよう。**伊丹市民オペラ**《椿姫》、**河内長野マイタウンオペラ**《ホフマン物語》、**立川市民オペラ**《カルメン》、**まつもと市民オペラ**《ちゃんちき》、**相模原シティオペラ**《椿姫》、**新宿区民オペラ**《エフゲニー・オネーギン》（この他に、中・小規模会場で《こうもり》）、**杉並区民オペラ**《道化師》《カヴァレリア・ルスティカーナ》などがある。**テアトロ・リリカ熊本**は、熊本地震からの復興記念として《蝶々夫人》を、**鹿児島オペラ協会**が、《メリー・ウィドウ》《愛の妙薬》を上演。これらは各地域で毎年、あるいは定期的に、大規模な会場での公演を実施しているオペラ団体である。

3～4年に1度のペースで大規模な公演を主催してきた**三河市民オペラ**が《イル・トロヴァトーレ》を上演した。三河市民オペラ制作委員会を構成するメンバーは、地域の会社経営者などが中心。文字通り地域住民の手仕事による制作だが、園田隆一郎の指揮、高岸未朝の演出に、並河寿美、森谷真理、笛田博昭、城宏憲ら豪華なソリスト陣を迎えて、優れた成果をあげ、第26回（2017年度）三菱UFJ信託音楽賞を受賞した。

地域でのオペラ活動を継続しているオペラ団体が大規模な会場での定期公演を行った。**仙台オペラ協会**が《フィガロの結婚》、**名古屋二期会**が《椿姫》を上演。**北海道二期会**は、《不思議の国のアリス》や《ヘンゼルとグレーテル》をそれぞれ中・小規模会場で。北海道は2018年の新劇場開場を控えている。**オペラ彩**は、《トゥーランドット》を大規模劇場で上演、《泣いた赤鬼》の上演も大規模および中・小規模の会場で複数回行った。これらの組織は歌手たちが出演者を兼ねて、あるいは制作に徹する形でオペラ団体の運営や公演制作の中核を担い、その活動を長く支えていることが特徴となっている。

3. 劇場・音楽堂のオペラ制作

3-1. 劇場・音楽堂のオペラ制作

新国立劇場の2017/2018は、飯守泰次郎オペラ芸術監督の最後のシーズン。「ニーベルングの指環」は、2016/2017シーズンの《ジークフリート》、2017/2018シーズンの《神々の黄昏》で、全4夜のシリーズが完結した。故ゲッツ・フリードリヒ演出によるフィンランド国立歌劇場の協力での上演だった。

2017年に行われた新制作は、この2作品の他、《ルチア》を加えた合計3作品。《ルチア》は、モンテカルロ歌劇場との国際共同制作公演で、新国立劇場で新しく制作したプロダクションの幕を開けるという意味のある公演となった。さらに、タイトル・ロールにオルガ・ペレチャッコ＝マリオッティが配役されたという話題性もあって、観客席は満員の盛況で、熱気あふれる公演となった。国立のオペラ劇場として、積極的な世界発信の力を持つには海外の劇場との継続的なコミュニケーションのパイプをつくり、良好な関係を築くことが必須である。そうした展開の布石となるよう願いたい。

これ以外に上演された《カルメン》《蝶々夫人》《フィガロの結婚》《オテロ》《ばらの騎士》は、これまでに一定の評価を得て、それぞれ複数の再演を重ねてきたプロダクション。《椿姫》も前回の初演時に美しい衣装等が評判を呼んだ舞台だった。

日生劇場のプロダクションが、演出家や指揮者に若手を起用して、人材の活動機会確保の場となっている。《ラ・ボエーム》は伊香修吾演出、園田隆一郎の指揮で、劇場公演のみならず、劇場外での公演も実施した。《ルサルカ》は演劇の世界で国内外に多くの舞台を送りだしてきた宮城聰を起用、山田和樹の指揮と読売日本交響楽団の演奏は、ドヴォルザークの音楽の魅力を見事に描き出した。同プロダクションは、平成29年度（第72回）文化庁芸術祭賞優秀賞を受賞。

びわ湖ホールは、「ニーベルングの指環」の新制作を開始、序夜《ラインの黄金》をミヒャエル・ハンペの演出、芸術監督の沼尻竜典の指揮で上演した。現在日本で、「指環」上演が多様な主催者により並行して進む。中でも、とりわけ新演出によるプロダクションを制作して全幕上演する同ホールの制作側の苦労は察するに余りある。それだけに完結までの長い道のりを見守りたい。

《連隊の娘》と《ミカド》は、びわ湖ホール声楽アンサンブルのメンバーや、かつて在籍していたメンバーを中心に配役された。同ホールの中劇場は、会場の規模が若手公演には適している。《連隊の娘》は、中村敬一のオーソドックスな演出だったことと、指揮の園田隆一郎が歌い手の呼吸に巧みにあわせていたことで、若手歌手達が歌唱に集中できた。同じく園田指揮、中村演出の《ミカド》は、一歩間違えば下品になりかねないキャラクター設定を若い歌手達がこなした。若さが客席を沸かせた2つのプロダクションだった。

兵庫県立芸術文化センターは、《フィガロの結婚》。中村恵理のスザンナが、さすがの歌唱。

この他、ドイツのキール歌劇場の専属歌手である高田智宏の伯爵、並河寿美の伯爵夫人も、落ち着きのある舞台姿に加えて優れた歌唱を聴かせた。結果として、日本人歌手のキャストによるアンサンブルが高い評価を得た。

3-2. 劇場・音楽堂等の共同制作

我が国の劇場・音楽堂等の共同制作は、劇場だけではなく、協働するオペラ団体やオーケストラ、バレエ団等が、プロダクションごとに、組む相手や役割分担を代えて取り組んできた。

2017年に劇場・音楽堂等が主体となって実施した共同制作には、(公財)**金沢芸術創造財団**と**東京芸術劇場**((公財)東京都歴史文化財団)が中核となって実施された2つのプロダクションがある。笈田ヨシ演出の《蝶々夫人》は国内巡回公演を意識、比較的簡易な舞台美術での、アメリカと日本、生と死の二項対立を取り入れた演出となった。本来は描かれていない蝶々夫人の父親の霊を登場させたり、「昭和初期の日本の何処か」を設定したりして、一定の読み替えを行っている。映画監督の河瀬直美演出の《トスカ》は鳥居や富士山を舞台上に登場させるなど古代の日本を意識した内容となった。

この他、オペラ団体が関わって制作した《ノルマ》《ばらの騎士》《魔笛》などが、文化庁の劇場・音楽堂等活性化事業［共同制作支援事業］の枠組みでの大型上演だった。

韓国の**大邱(テグ)オペラハウス**はJMSアステールプラザで、《ラ・ボエーム》を実施。これは広島市・大邱広域市姉妹都市提携20周年記念事業だった。

3-3. 劇場・音楽堂等による周年事業

周年事業の機会に上演が行われるのも、大規模で祝祭性を帯びているオペラ公演にみられる特徴である。

新国立劇場が開場して20年の月日がたつ。2017年10月からの2017/2018シーズンは20周年記念事業として公演が行われた。関西歌劇団の《白狐の湯》《赤い陣羽織》は、**アルカイックホール**開館35周年記念事業だった。**富山県高岡文化ホール**が開館30周年記念《魔笛》(コンサート形式・抜粋)、**奥州市文化会館**開館25周年事業《ラ・ボエーム》なども行われた。**川崎市スポーツ・文化総合センター**開館記念事業《ノルマ》、福島県**白河文化交流館コミネス**開館記念事業《魔笛》、**秩父宮記念市民会館**開館記念公演として、ちちぶオペラにより《ミカド》が上演された。このように、劇場・音楽堂等の周年および開館記念事業でのオペラ公演が複数記録されている。

4. その他の動き

4-1. オペラを中心とした音楽祭やオーケストラの活動など

(音楽祭)

東京・春・音楽祭が、2014年から取り組んできた「ニーベルングの指環」は、2017年は第3夜《神々の黄昏》で完結。2017**セイジ・オザワ松本フェスティバル**で、《子どもと魔法》が、本公演(9月3日)と子どものための公演(9月5、6日)にとりあげられた。

オペラを中心としたフェスティバルや芸術祭が日本でなかなか実質的には成立しない中で、行政が舞台芸術を振興する大きな枠組みを設けているケースもある。「**文化庁芸術祭**」「**都民芸術フェスティバル**」などがその例である。毎年、複数の舞台芸術公演の機会が、これらの枠組みの中で確保されている。

平成29年度(第72回)文化庁芸術祭参加公演には、日生劇場、大阪音楽大学ザ・カレッジ・オペラハウス、みつなかオペラ、関西二期会等が参加した。「都フェス」と呼ばれる都民芸術フェスティバル参加公演として、東京文化会館で藤原歌劇団《カルメン》、東京二期

会《トスカ》、新国立劇場中劇場で日本オペラ協会《よさこい節》が、2月から3月にかけて上演された。

この他にも、地域の県民芸術祭、市民芸術祭等の名前のもと、実施された公演がいくつか。第12回**さっぽろオペラ祭**2017として、北海道二期会が《不思議の国のアリス》を実施、シギスヴァルト・クイケン指揮によるラ・プティット・バンドの《ラ・カンテリーナ》が**新・福岡古楽音楽祭2017**で上演された。

（オーケストラの取組み）

読売日本交響楽団は、主催公演として演奏会形式によるオペラ作品への取り組みを行ってきた。2017年は、11月にシルヴァン・カンブルランと《アッシジの聖フランチェスコ》に取り組み、同楽団と常任指揮者カンブルランとの3期にわたる演奏活動の集大成ともなる演奏を披露した。同作は、カンブルランがヨーロッパ各地で何度となく上演を重ねて、最も得意とする作品の一つ。個々の奏者の技巧の粋の積み重ねに加えて、オーケストラが一つの楽器であるかのような響きを生んで、コンサートホール空間に音の大伽藍を築き上げ、指揮者の棒裁きにも見事に応えた。同楽団は4月にバルトーク《青ひげ公の城》も定期演奏会で取り上げている。

オーケストラ・アンサンブル金沢が定期演奏会で《セビリアの理髪師》（演奏会形式）をマルク・ミンコフスキの指揮で取り上げた。生き生きとしたオーケストラのアンサンブル、ミンコフスキのキャスティングによるソリスト陣がキャラクターに合った歌唱を聞かせ、さらに演出にイヴァン・アレクサンダーが入って舞台上やホール内を動き回る歌手を整理して、優れた上演となった。

オーケストラの演奏会とはいえ、演出家を起用して歌手の動きを整理することで、上演を成功に導いた例をいくつか。**東京交響楽団**が音楽監督ジョナサン・ノットとの《ドン・ジョヴァンニ》の演出監修に原純を起用した。**日本フィルハーモニー交響楽団**が首席指揮者ピエタリ・インキネンとの《ラインの黄金》（コンサートオペラ形式）の演出に、**NHK交響楽団**がパーヴォ・ヤルヴィ指揮《ドン・ジョヴァンニ》のステージ演出に佐藤美晴を迎えた。佐藤は、**愛知祝祭管弦楽団**の《ワルキューレ》（コンサートオペラ形式）も演出構成をした。各オーケストラが、演奏会形式ながら、総合舞台芸術としてのオペラ作品へのアプローチを工夫し、高めようとする動きだった。

東京交響楽団が千住明の《滝の白糸》第3幕を大友直人指揮、演奏会形式で取り上げたのは、東響コーラスの創立30周年を記念する公演だった。同コーラスは、東京交響楽団が合唱付き作品に取り組む際には欠かせない存在である。**東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団**が藤岡幸夫指揮で千住明作曲《万葉集》を、高関健指揮で《夕鶴》をそれぞれ演奏会形式でとりあげた。この他にも、オーケストラの定期演奏会等の機会で、多様なオペラ作品の抜粋上演などが行われている。

4-2. 新たな創作の潮流

長田原（おさだもと）作曲《Four Nights of Dream》は、**東京文化会館**（（公財）東京都歴史文化財団）が、ニューヨークの**ジャパン・ソサエティ**と共同制作して、日本初演を行った。三枝成彰作曲《狂おしき真夏の一日》、**熊本シティオペラ協会**主催の樹原孝之介作曲《笛姫》（第59回熊本県芸術文化祭参加事業 九州・沖縄から文化力プロジェクト　熊本シティオペラ協会30周年記念公演～熊本地震復興応援）などの作品は大規模会場で世界初演が行われた事例である。

三輪眞弘作曲《新しい時代》が**愛知県芸術劇場**と**ザ・フェニックスホール**で再演される

などの機会を得た。この他、《メイキング・カルメン》など、既存の作品をリメイクして上演した例などもあった。海外では、細川俊夫作曲の《二人静―海から来た少女―》が世界初演されている。

2017年は、モンテヴェルディ生誕450周年、メシアン没後25周年記念の年だった。**アントネッロ**によるモンテヴェルディ《ポッペアの戴冠》、**読売日本交響楽団**による《アッシジの聖フランチェスコ》はこうした機会を捉えてのもの。先述の《Four Nights of Dream》は夏目漱石生誕150年記念という意味もあった。

4-3. 人材育成の機会と若手の活動

新国立劇場オペラ研修所の公演として、《コジ・ファン・トゥッテ》を中劇場で上演、ガッザニーガ作曲の《ドン・ジョヴァンニ》の上演を小劇場で実施、歌手育成の成果披露の場とした。

若手歌手が所属して活動する**びわ湖ホール声楽アンサンブル**の公演事業を数多く行っている。《森は生きている》（抜粋）を県内各地のホールで巡回公演し、県立の劇場としての役割をアピールした。劇場内外での声楽アンサンブルの活動は、ソロ、アンサンブルなど、多岐にわたっている。

この他、指揮者の育成も行っていて、芸術監督自ら指導する「沼尻竜典オペラ指揮者セミナーⅢ～『ラ・ボエーム』指揮法～若手指揮者のワークショップ」を実施している。2017年は、公募で選ばれた5人の指揮者達が3日間にわたる公開でのワークショップに参加、びわ湖ホール声楽アンサンブル・ソロ登録メンバーをソリストに迎え、加えて2日目から参加する大阪交響楽団と最終日の成果発表会も行っている。

大学オペラ公演こそ人材育成の機会に違いない。**東京藝術大学**と**国立音楽大学**は、それぞれ《フィガロの結婚》を、**昭和音楽大学**と**上海音楽学院**の交流プロジェクトは《ドン・ジョヴァンニ》を上演し、モーツァルトのオペラ作品で、日頃の教育成果を披露した。

観客育成の事業も各劇場や各団体により、継続して行われている。

日生劇場の「ニッセイ名作シリーズ」は、中高生を劇場に招待して鑑賞教室が行われている。**新国立劇場**の「高校生のためのオペラ鑑賞教室」は同劇場内公演と関西での公演が行われた。劇場が若い観客のための優れた鑑賞機会を確保することで、大きな効果を生むに違いない。この他、各団体や劇場・音楽堂等も学生の優待や招待などの制度を設け、鑑賞機会の確保に努めている。

5. オペラ制作を取り巻く環境

5-1. 助成構造

（オペラ団体への助成）

平成28年度からは大規模な事業助成として、文化庁・文化芸術振興費補助金「舞台芸術創造活動活性化事業」が行われている。平成28年度からの「舞台芸術創造活動活性化事業」のうち「年間団体支援」（平成28年度）枠と「年間活動支援」（平成29年度）枠では、東京二期会は《トスカ》《蝶々夫人》《こうもり》、日本オペラ振興会は藤原歌劇団の《カルメン》《セビリャの理髪師》《ルチア》、日本オペラ協会の《よさこい節》《ミスター・シンデレラ》が助成対象となった。同事業の「公演事業支援」では、オペラシアターこんにゃく座《想稿・銀河鉄道の夜》《スマイル―いつの日か、ひまわりのように》、関西歌劇団《白狐の湯》《赤い陣羽織》、関西二期会《イリス》《魔弾の射手》に、堺シティオペラ《ラ・ボエーム》東京オペラ・プロデュースの《ベルファゴール》《ラインの妖精》《ビバ！ラ・マンマ》、名古屋二期会《椿姫》、さらに声楽アンサンブルを擁するびわ湖ホールの《連隊の娘》への助成が行われた。

「芸術文化振興基金助成事業」で複数の助成スキームが設定される中、最も規模の大きなものには「現代舞台芸術創造普及活動」がある。音楽分野では、北海道二期会《不思議の国のアリス》、仙台オペラ協会《フィガロの結婚》、四国二期会《扇の的》、紀尾井ホール（（公財）新日鉄住金文化財団）《オリンピーアデ》等が対象となった。この他にも「2017セイジ・オザワ松本フェスティバル」の《子どもと魔法》、ニッセイ文化振興財団《ラ・ボエーム》と《ルサルカ》が同助成を受けた。

「芸術文化振興基金助成事業」の「アマチュア等の文化団体活動」枠での助成を受けた団体による公演も複数行われた。平成28年度はオペラえひめ《椿姫》、平成29年度は愛知祝祭管弦楽団《ワルキューレ》、弘前オペラ《フィガロの結婚》、SOKA市民オペラ《カルメン》、オペラリリカ八王子《コジ・ファン・トゥッテ》、ひたちオペラ合唱団《こうもり》、OYAMAオペラアンサンブル《ドン・ジョヴァンニ》などが大規模会場で上演されている。

上記は、日本芸術文化振興会を通じて、各団体に配分されている助成金である。この他に以下、文化庁の各種事業から、オペラ公演に対して行われた助成をまとめてみよう。

「戦略的芸術文化創造推進事業」では、日本オペラ振興会《よさこい節》（高知公演）に助成が行われた。さらに、「文化芸術による子供の育成事業―巡回公演事業―」では、オペラシアターこんにゃく座《森は生きている》《ロはロボットのロ》、ミラマーレ・オペラ《てかがみ》、東京合唱協会《あまんじゃくとうりこひめ》、アーツ・カンパニー《カルメン》、東京オペレッタ劇場《小鳥売り》等の巡回公演が行われた。

（劇場・音楽堂等への助成）

文化庁「劇場・音楽堂等活性化事業［特別支援事業］」では、各地域の中核となる大規模館の主催事業が助成されている。この枠組みでは、兵庫県立芸術文化センター《フィガロの結婚》、びわ湖ホール《ラインの黄金》《不思議の国のアリス》（演奏会形式）《森は生きている》（抜粋）、東京文化会館《Four Nights of Dream》《ボッカチオ》（ダイジェスト版）、《Help! Help! グロボリンクスだ！～エイリアン襲来!!～》、ミューザ川崎の東京交響楽団との《ドン・ジョヴァンニ》が実施された。

「劇場・音楽堂等活性化事業［共同制作公演］」のうち、平成28年度は全国共同制作プロジェクト《蝶々夫人》が、東京芸術劇場や金沢芸術創造財団が中心となって行われた。平成29年度は東京と金沢の各財団が中心となる枠組みは変わらないものの、協働する館をかえて《トスカ》が行われている。

iichiko総合文化センターと神奈川県民ホールは、東京二期会制作の《魔笛》上演を行った。平成29年度の「共同制作支援事業」では日生劇場、びわ湖ホール、川崎市スポーツ・文化総合センターによる藤原歌劇団との《ノルマ》が助成された。加えて、愛知県芸術劇場、東京文化会館、iichiko総合文化センターによるグラインドボーン音楽祭と東京二期会の国際共同制作《ばらの騎士》が支援対象となった。国内劇場同士の共同制作公演は、2017年の公演の中でも特に大型公演が並ぶ。

「平成29年度文化庁文化芸術創造活用プラットフォーム形成事業」により、新国立劇場「高校生のためのオペラ鑑賞教室・関西公演」《蝶々夫人》などが助成された。

「芸術文化振興基金助成事業」でも、「地域文化施設公演・展示活動：文化会館公演」で、河内長野マイタウンオペラ《ホフマン物語》、奥州市文化会館《ラ・ボエーム》、ひむかオペラ《魔笛》、オペラ「乙和の椿」公演実行委員会《乙和の椿》、みつなかオペラの《妖精ヴィッリ》と《外套》など、複数の地域での組織の活動が採択助成されている。

5-2. 舞台芸術政策の新たな展開

「文化芸術基本法（改正）」が2017年6月に施行されたことをはじめとして、2017年から2018年にかけて議論された法律や基本計画に注目すると、大きな転換点となりうる年だったことがわかる。

「文化芸術振興基本法の一部を改正する法律」が2017年6月23日に公布、施行された。これにより、文化芸術そのものを振興するという考え方から、文化芸術が、観光、まちづくり、国際交流、福祉、教育、産業等の関連分野と連携することを重視する方向へと、その考え方が移行したと言える。地方公共団体に対しても、文化芸術の推進に関する計画を定めるよう努めることが書き込まれた。今後は、これらをどのように実現していくのかが問われている。さらに、2017年には、基本計画策定に向け、文化審議会文化政策部会の下、様々なWGが設置、議論が重ねられて、「文化芸術推進基本計画（第1期）」が、2018年度からの実施に向けて策定された。文化芸術基本法に基づいて文化芸術を推進するための本基本計画では、数値目標が具体的に掲げられたことに大きな特徴がある。

こうした政策の動きを、オペラをはじめとする舞台芸術の現場がどのように受け止めて、実際の制作に反映させるのかが問われている。社会に対して、その存在の意義をどのように説明してゆくのか。大規模な助成に依ることの多い舞台芸術公演制作において、説明責任を果たすことは避けて通れない。

6. まとめ

歌手が立ち上げ、これまで継続してきた各地域でのオペラ団体の活動は引き続き意欲的に行われている。さらに、オーケストラや合唱団がオペラ公演に取り組む状況もある。加えて、中核となる劇場・音楽堂等による主催公演、共同制作等においても、体制づくりや手法の工夫などにより、重要な公演が開催された。大学等教育機関による主催公演や、劇場や団体が運営する歌手の研修所公演なども開催されて、多様な主体がオペラ公演に取り組んでいる。

一方で、リーマンショックや東日本大震災の影響で、海外の歌劇場や音楽祭、プロジェクト形式の来日団体等の公演数は減少したまま勢いが戻らない状況がある。大規模な公演も、巡回型の公演来日も、公演回数が回復していないのだ。これには、日本のオペラを取り巻く環境が変化していることが影響しているのではないだろうか。日本の近隣諸国、すなわち中国、韓国、台湾等でのオペラ公演の上演状況とも関係しているのかもしれない。

また、オペラの世界を支えてきた人材の顔ぶれが徐々に入れ替わる時期に来たようだ。

第二次世界大戦後間もなくオペラ活動を担ってきた世代を受け継いで、世界のオペラ界を牽引してきた人材の訃報に接することも増えてきたように思う。立場や専門、活動していた時期や場所を問わず、お名前をあげるならば、海外では、アルベルト・ゼッダ、フィリップ・ゴセット、エンツォ・ダーラ、ニコライ・ゲッダ、クルト・モル、若くして逝ったディミトリー・ホロストフスキー。国内では、大賀寛、芝祐久、原田茂生、高崎保男の各氏など。いずれも2017年に亡くなった方々だ。この世界を担ってきた人々の名前が次々と消えていく。世代交代の波は否応なく押し寄せている。

しかしながら日本でも、若い世代が徐々に舞台芸術の世界で役割を担うようになってきた。指揮者、演出家、歌手等が、少しずつ着実に機会を得ていることは喜ばしい。現代社会を映し出す鏡としてのオペラ公演が、確かな歩みを進めるために、新たな才能による創造活動を一層期待したい。